

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 13-2

第3回国際教育シンポジウム報告書 「都市社会の子どもたち」

目 次

はじめに	2
国際比較調査にあたって	3
〔第3回国際教育シンポジウム報告書〕	5
コーディネーター&パネリスト/プロフィール	6
I. 基調報告	
都市社会の子どもたち	10
●家族	10
●子どもの放課後とテレビ視聴	14
●親子関係	19
●成績と将来の見通し	23
●幸福感と成長欲求	28
●性役割	32
II. 全体討議	
1. 調査国からの報告	37
●特殊事情の下での学校教育=スウェーデン	37
●万人教育をさらに推進=アメリカ	39
●教育界にも自由化の波=中国	40
2. 成長欲求	41
●比例する社会的地位と落ちこぼれ	41
●生活はきびしいが明るい表情	43
●子どもと喫煙問題	45
3. 性役割	47
●女性の解放と社会進出	47
●合理的な解決と情緒的な対応と... ..	49
●高まる女性解放運動、縮小する性差	50
4. 親子関係	52
●一人っ子社会の中の子どもたち	52
●家族崩壊とアメリカの子どもたち	53
●希薄な親子関係とその背景	54
5. まとめて代えて	56
学校の機能についての国際比較	60
〔特別寄稿〕	
スウェーデン：福祉社会のなかの家族	68
中国開放政策下の子どもたちとカリキュラム改革	73

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとは関係ありません。

はじめに

(株)福武書店 教育研究所
島内行夫

日本の子どもをよりの確に把握するため始まった国際比較調査も1988年、1990年に続き今回で3回目を迎えました。回を重ねるにつれ、都市間の違いや歳月の流れに伴う子どもたちの変化を明確に把握でき、かつ多くの方々に活用していただけるデータとなってまいりました。

第3回国際教育シンポジウム「都市社会の子どもたち」は、それら国際比較調査の結果をもとに、調査にご協力いただいた4か国の方々にお集まりいただき、1992年12月に開催いたしました。(調査結果は、すでにvol. 12-4「第3回国際比較調査」として発刊)

今回は新たに調査国に中国とスウェーデンを加え、パネリストの方々による大変熱のこもった討議が展開されました。

少子化政策を徹底させている中国と、社会福祉が充実し性的平等が達成されたといわれるスウェーデン。これらの特徴ある社会が、

子どもたちの意識や行動にどのような影響を与えているのか、また日本やアメリカとどのように違うのか、大変興味深いお話を聞くことができました。

この度、このシンポジウムの内容をぜひ多くの方々にお伝えいたしたく、『モノグラフ・小学生ナウ』という形で発刊することにしたしました。各国の教育事情を理解していただくとともに、他の国々との比較を通して日本の教育事情や子どもたちの現状を認識していただくご参考となれば幸いです。

第3回国際教育シンポジウム

会場：日本海運倶楽部国際会議場
(千代田区平河町)
日時：1992年12月11日(金)
午後1時30分～

国際比較調査に あたって

静岡大学教授
深谷昌志

今回の調査の特色

国際比較調査は、今回で3回目にあたる。このところ、さまざまな領域での国際比較調査が行われているが、われわれの調査には以下のような特色があると考えている。

① 現地でのプリテストを重視

いずれの調査も、われわれが現地を訪れ、現地の専門家と打ち合わせをしつつ、子どもたちにプリテストを行い、小学校の先生などに集まってもらい、項目の検討を重ねる手順を追ってきている。それだけに、現地の子どもたちの状況に応じた調査票ができていると信じている。

② 日本サイドの視野を軸に

現地で打ち合わせをしていると、それぞれの地域で子どもの問題をかかえているのがわかる。アメリカだと、学力の低下や家庭の崩壊、そして多民族化に伴う摩擦などに、研究者の関心が集中している。そうしたテーマも大事だと思うが、そうしたテーマを盛り込んでいくと、調査の狙いそのものが分裂してしまう。そこで、日本の子どもを理解するため

に必要なデータを集めるというつもりで、日本サイドの視野を軸に据えて調査票を作ることになっている。

③ 都市間の比較に限定

国際比較というと、国の間での比較を連想する。しかし、アメリカといってもロスやニューヨークもあれば、テキサスの農村部、さらに山脈に囲まれた山間部の暮らしもある。そうした地域格差は、日本で考えるものよりはるかに大きい。

したがって、アメリカの子どものデータをとろうとすると、おびただしい地域での調査が必要となり、個人レベルの研究の手にあまる。そこで都市間に限定して、比較調査を行うことにした。

もちろん、ロスの中にダウンタウンもあればホームレスの地域もあり、ピバリーヒルズのような高級住宅地、さらに郊外のしゃれた住宅地のように、ロスといっても、格差はもちろん大きい。

調査実施にあたって、都市の中でも地域を限定して調査に臨んでいる。そして、同じ都市の中でも居住地により、どれくらい意識が

異なるかの分析に努めてきた。しかし、そうした検討は専門家に関心があっても、一般的にはなじみが薄いと思い、レポートから割愛してある。

④ 子どもの声を生かす

こうした調査を行うとき、それぞれの国の大学へ行き、専門家の協力を得て、調査に臨むのが筋道であろう。しかし、諸外国でも教育や心理の専門家は多いが、子どもを対象とした調査を重ねている研究者はそれほど多くはない。しかも今回のように、サクラメント、ストックホルム、ハルビンの3都市で専門家を探し、協力を得ようとする、それだけでかなりの時間がかかる。

そこで、①でふれたような形で、直接教室を訪れ、子どもたちから話を聞き、それに教師や親からの情報を集めながら調査票を作成ことにした。そうした意味では、子どもの声を生かすことに全力を注いだ。

今回の調査地域

これまでの2回の調査を通して、東京と共通する面の多いソウルやタイペイ、そしてロス、シアトルなどの地域に住む子どもの分析を行ってきた。そこで今回は東京の子どもを考えるにあたって、示唆に富むと思われる地域の子どもたちの姿を意図的に選んで分析してみることにした。

1つは福祉社会に住む子どもという意味で、北欧、中でもスウェーデンの状況に迫りたいと思った。幸いにして、東海大学の山下教授のご協力を得て、ストックホルム——実際には、調査協力を得ることができたマルメとカールスクルーナの子ども。ただし、わかりやすさを考えて、レポートの上では、その子どもたちをストックホルムの子として扱うことにした——の調査を行うことができた。なお、ベタション博士はマルメの調査で中心的に協力していただいた人である。

そして、もうひとつは一人っ子政策が子どもに与える影響を知りたかったので、中国を対象をしぼった。しかし、天安門事件の後遺

症をかかえ微妙な時期だったので、ペキンでの調査はむずかしかった。そこで東京学芸大学大学院に勉強に来ている李力さんと母親で黒竜江省で要職についておられる王軍さんの力添えで、ハルビンとシンヨウで調査を行うことになった。

なお、アメリカについては、比較的安定したよきアメリカの雰囲気を残している地域ということで、ライルス博士のご尽力で、サクラメントを調査地に定めた。もっとも、前回までのロスやシアトルと同じように調査を実施できたのは、サクラメント市の中でも階層的にやや高い人たちの住む地域である。したがって、この結果はアメリカの子どものデータとしては、平均よりやや——あるいはかなり——安定し、教育熱心な地域の反応であることを付記しておきたい。

また、家族の問題について、アメリカでの調査はプライバシーを侵すというので実施がむずかしかった。前回の調査でも、ロスで校長がアンケート用紙を保護者に配ると同時に、「こういう調査を実施するが、同意できない人は校長まで申し出てほしい」というメモをつけた。そして、異論のある保護者の子どもを外して調査を行った。また、別の学校では、校長が「深谷教授が国際比較調査を行う計画があり、私も賛同した。データを戻してくれるというので、学校にもプラスするところが多いから、子どもたちの参加を了解してほしい。ただし強制ではないので、月曜日の1時間目はアンケートの記入時間なので、参加しない子は2時間目から登校するように」のようなメモを配っていた。

ストックホルムやハルビンについても、それぞれの苦心談はあるが、現地の校長をはじめとする教育関係者や子どもたちの協力を得て、調査を実施することができた。

なお、調査票は日本で回収し、分析は日本で実施し、データをそれぞれの学校へ戻す形で行われた。国際宅配便の普及が、こういう面のやりやすさを可能にしたのは興味深かった。

第 3 回
国際教育シンポジウム報告書
「都市社会の
子どもたち」



*コーディネーター&パネリストのコメントは、シンポジウム当日配付されたパンフレット制作時点のものです。



コーディネーター

深谷 昌志

静岡大学教授。1933年東京都生まれ。東京教育大学大学院博士課程修了。教育社会学専攻、教育学博士。主な著書に「孤立化する子どもたち」(NHKブックス)、「子ども考現学」(福武書店)、「無気力化する子どもたち」(NHKブックス)などがある。

日本の子どもたちの現在が、どういう問題をかかえているか。他の社会の子どもたちとの比較の中で日本の子どもをとらえる必要性を感じる。

1988年・1990年に続いて、これまでの成果をふまえつつ、新たな調査地でのデータを加え、より多角的に子どもをとらえようとしたのが今回の調査である。

日本だけのデータだとそれほど問題を感じにくいですが、他の社会と対比すると、問題がシャープにうかんでくる。今回の調査結果でも、そういうデータが少なくない。幸い、さまざまな分野の専門家をおよびすることができたので、社会的な相違を視野に入れつつ、幅広い見方で子どもたちの成長のスタイルを掘り下げていきたい。



基調報告/パネリスト

深谷 和子

東京学芸大学教育学部教授。1935年東京都生まれ。東京教育大学大学院博士課程修了。児童臨床心理学・児童社会学専攻。千葉市在住、一男一女の母。

中国とスウェーデンの子どもたちの成長には、かねがね関心をもっていました。むしろ私たちだけの関心ではないでしょう。福祉の理想が高度に達成され、特に男女平等が実現しておとなの間で性役割が限りなく希薄になると、子どもたちの成長のスタイルはどうなるのか、誰だって知りたくなります。また、1.54という少子化時代の中で、お隣の中国は国中が一人っ子という変わった社会を作っています。そこでの子どもの成長から私たちは何を学べるでしょうか。

国際比較調査の第3回目に、ストックホルムとハルビンを調査地域とすることができて、研究者冥利につきる思いでいます。今回も私たちを助けてくださった多くの方々、東海大学の北歐文学科山下泰文先生をはじめ、たくさんの方々から感謝を申し上げます。これまでの2回のデータも、この2つの地域のデータを加えることで、一層生きてきました。どうぞシンポジウムの内容にご期待ください。



パネリスト

オーケ・ペタション

マルメ教育大学教育学部応用言語学科専任講師。哲学博士。言語開発、作文訓練、コンピュータを利用した作文、その質的評価などについて研究。スウェーデン語の全国テスト（構成、開発、評価）の調査研究にも従事。中学校から大学院レベルにわたる教科書の作成にも関わる。

今回のシンポジウムの重要な目的は、工業社会における小学5年生の生活の全体像を描くことである。このために我々参加者は、アンケート調査の結果に基づいて、これらのグループの子どもたちそれぞれに共通した特徴を見極めなければならない。

さまざまな国あるいは文化圏から参加した研究者たちが、そのようなベースから出発して、子どもたちの全体像に対する共通理解に達することができればと思う。これらのグループの子どもたちの間の類似点は、その年齢によるところが大きく、したがって容易には影響され得ないものは何であるかを、たぶん我々に教えてくれるだろう。一方で社会全体が子どもたちの状況を改善するために何ができるかをとおとも考えていかなければならない。と同時に、その国独特のパターンの重要性にも留意しなければならない。ライフスタイルや文化や教育制度のような分野では国によって長い固有の歴史があり、このシンポジウムで得られるであろう結論や提言を生かしていくことは容易ではない。

スウェーデンでは、広い意味での新しい教育方針を立てるための国際的な教育比較研究が強く求められている。スウェーデンは、政治的にも、経済的にも、社会的にも、精神的にもまだまだアンバランスであり、国家の将来は国際性の獲得にかかっている。



パネリスト

山下 泰文

東海大学文学部北欧文学科教授。1944年兵庫県生まれ。神戸市外国語大学大学院修士課程修了。英語学専攻。ストックホルム大学留学。現代スウェーデン文学を専攻。大学ではスウェーデン語とスウェーデン文学を担当。主な著訳書に『スウェーデン語文法』（大学書林）、『北欧姉妹語入門』（共著）（鷹書房）、『スウェーデンの文学と言語』『スウェーデンハンドブック』『スウェーデン社会研究所編』（早稲田大学出版部）など。

語学研修に参加する学生を引率してスウェーデンによく行く。その都度、日本の学生は少し幼いが、素直で可愛いと皮肉まじりに褒められる。言われてみれば、彼らにはスウェーデンの学生などと比べてかなり幼稚な言動が目立つ。何に原因するのだろうか。子ども時代の教育や環境に関係があるとすれば、管理教育、厳しい校則、画一的教育、平等主義教育、通塾、入試、過剰集団意識、低俗幼稚なテレビ番組、平和すぎる社会、平穏すぎる家庭、豊かな物的生活、等々にその根があるのだろうか。学校や社会が求めるいわゆる「よい子」教育が従順すぎる子ども、可愛いのが、反面、没個性的な子どもを作る結果になってはいないだろうか。北欧の女性は子どもでもたくましい。確かに身体も大きい、それだけではない。性の区別からくる女らしさ、可愛らしさ、もはや女性の美德でも魅力でもないらしい。日本の女生徒のひ弱さ、ひいては幼稚さは性を区別しすぎる教育や社会にその一因があるのかもしれない。児童の国際比較、特にスウェーデンとの比較でこの辺が探れば面白い。



パネリスト

ウィルソン・ライルズ

ウィルソン・ライルズ&アソシエイツの創業者であり、現会長。1940年、アリゾナ州北部のアパッチ・インディアン居留地キャンプで教師生活をスタート。1970年にはカリフォルニア州の教育長に選ばれる。州学校教育長評議会の会長のほか、4人の大統領の教育問題アドバイザーも務めた。

合衆国憲法が制定されたとき、無料の公教育のための条項は入っていなかった。憲法創案者たちは、一部のエリート階級中心のイギリスの教育システムをその手本としたからである。州政府が公教育に責任をもつようになったのは1789年以降である。

いつの時代でも、アメリカが危機と思われる事態に直面すると、教育の重要性が強調される。例えば1957年にソ連が最初の Sputnik を打ち上げたとき、テクノロジーの分野で国家的な失敗をしたと非難され、数学と理科に重点をおいた教育改革が推進された。

昨年、ブッシュ大統領と政府委員会が国家的教育目標を提出し、2000年までに以下のことを達成するよう勧告した。

- ・高校卒業率を90%以上に高める。
- ・数学と理科の能力が世界一になる。
- ・学校から薬物と暴力を排除し、学習の場にふさわしい秩序ある環境にする。

さらに、親の学校参加、最低基準テストの設定、コンピュータ利用の拡大、就学前の早期教育などを要求する団体の活動も目立つ。

次期大統領ビル・クリントンは、公立学校改革を最優先課題にすることを約束している。



パネリスト

市川 博

横浜国立大学教育学部教授。華東師範大学顧問教授。1937年東京都生まれ。東京教育大学大学院博士課程中退。わが国の社会科の授業研究に取り組みつつ、現代中国の教育の研究にも従事。1964年より今日まで『新中国年鑑』の「教育」欄を担当し、新中国の教育の動きを追いかけてきた。著書に、『実感的なわかり方をめざす社会科指導』（明治図書）などがある。

「近頃の子どもたちは……」という批判をしばしば耳にする。この言葉は今に始まったことではない。遠くギリシャ時代からいわれ続けてきたことであり、それは何時の世の、世代を異にする者の間に生ずる違和感にも1つの原因がある。それにしても、科学技術が急速に発達し難問が続出しつつある現在、次の世代はそれに果敢に取り組み解決を図る力量を蓄えてきているだろうか。安心して将来を託せない憂慮すべき状態にないだろうか。

だが、そうした子どもたちを生み出したおとなこそ、まず真っ先に批判され、己を正していかねばなるまい。また、各国の子どもたちがそれぞれどのような特徴、発達の歪みを生じているかを明らかにすることは重要であるが、今のおとながもっていない、明日を開く新たな可能性が子どもたちの中に育っているはずだ。それをぜひ探っていきたい。

I. 基調報告

都市社会の子どもたち

東京学芸大学教授

深谷和子



〔基調報告はシンポジウム当日の発表を収録したもので、くわしい調査結果は「都市社会の子どもたち」(vol. 12-4)を参照されたい。〕

都市社会の子どもたち



●家族)))

今回の調査のサンプル構成は表1に掲げた通りで、東京、ハルビン、サクラメント、ストックホルムの合計3,446名の小学校5年生を対象に、本年(1992年)3月から6月にかけて調査を行いました。

まずはじめに、子どもの家族と家庭での様子を見ていきます。表2をご覧ください。ここには第1回、2回のデータも合わせて掲げてありますが、子どもの数はハルビンが最も少なく、平均1.1人となっております。ハルビンでは厳密な一人っ子政策が行われていますが、農業、少数民族、第一子が障害児の家庭では例外規程がありますので、この数字になっていると思われます。タイペイ、サクラメント、オークランドは3人かそれをわずか

に超えておりますが、いずれにしても、少子化傾向は世界的に進んでいることがみられます。また同じ表の下、祖父母との同居率は、欧米文化圏では10%を切り、祖父母と同居している家庭は例外に近いのに対して、アジア文化圏では、20%から30%近い同居率がみられます。

表3は、寝室で誰と一緒に寝ているかですが、上のほう、欧米文化圏では1人が原則で、アジア文化圏では兄弟と一緒にかなりの割合を占めています。また表4に掲げましたように、親と同室で寝ている子どもの割合も、欧米文化圏とアジア文化圏では大きく変わっています。

次に、子どもの家庭生活の一端をみるため

に、朝食と夕食の様子をみてみます。表5をご覧ください。まず、朝ご飯を食べないで登校する子は、家庭で親の世話が十分受けられないことを示していると思われませんが、サクラメントが13%と最も高くなっており、これは今回のデータばかりでなく、第1回のシアトルでも17%、第2回のロスでも11%が朝ご飯を食べなかったと答えております。

しかも朝食を食べた子どもでも、表が示すように、孤食率、つまり1人で食べた、食卓に他の家族がいなかったと答えた者がサクラメントで33%、ストックホルムで34%と高くなっております。日本では家族揃って食卓を囲むことが、家族のしあわせのために大切にされてきておりましたが、東京の孤食率19%

という数字は、その点からいえば、家族の凝集性がなくなってきている「しるし」ともとることができますが、どう解釈されるでしょうか。

続いて、表6をご覧ください。夕食の情景には、朝食のときとは逆に、家族揃って食事をする家庭が、東京では41%と最低になっております。その右、逆に父親だけが不在の食卓は東京が最高で39%、これは父親が夜も仕事をしており、家に帰るのが深夜もざらという、日本企業の体質の問題によるものでしょう。

表の下から2番目、ソウルも日本と同様の傾向がみられます。

表1 サンプル構成（第3回国際比較調査）

地域名	サンプル構成	合計	男子	女子
東京	東京・札幌・仙台・名古屋	1,758	904	854
ハルビン	ハルビン・シンヨウ	522	258	264
サクラメント	サクラメント	542	267	275
ストックホルム	マルメ・カールスクルーナ	624	312	312

(人)

- 調査時期 東京 (1992年5月～6月)
- サクラメント (1992年5月～6月)
- ハルビン (1992年3月)
- ストックホルム (1992年5月～6月)

表2 子どもの数と家族

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム	オークランド	バンコク	ソウル	タイペイ
子どもの数	2.2人	1.1人	3.2人	2.4人	3.2人	2.9人	1.9人	3.0人
家族サイズ	4.5人	3.5人	3.7人	4.0人	4.6人	5.3人	4.8人	5.3人
祖父母との同居率	24.3%	18.6%	8.4%	3.1%	9.4%	26.5%	23.1%	29.6%

○ = 最大値
 — = 最小値
 (以下同)

表3 誰と寝ているか

	(%)			
	1人で	兄弟と	親と	その他
ストックホルム	89.1	7.9	1.7	1.3
サクラメント	65.3	29.4	3.3	2.0
オークランド	60.7	31.8	2.2	5.3
ハルビン	60.0	4.4	33.5	2.1
タイペイ	36.2	47.7	11.3	4.8
東 京	32.3	37.8	22.6	7.3
バンコク	24.3	39.0	33.6	3.1
ソウル	22.9	41.7	31.9	3.5

表4 親と同室で寝ている子

(%)							
ストックホルム	オークランド	サクラメント	タイペイ	東 京	ソウル	ハルビン	バンコク
1.7	2.2	3.3	11.3	22.6	31.9	33.5	33.6

表5 朝食の様子

(%)

	欠食率	孤食率	自分の家で 食べた割合	給食 その他
サクラメント	12.6	32.9	79.6	7.8
東京	1.4	18.6	97.7	0.9
ハルビン	1.2	24.5	98.2	0.6
ストックホルム	5.3	34.3	94.2	0.5
オークランド	8.0	38.6	89.5	2.5
バンコク	3.5	36.8	84.2	12.3
タイペイ	1.7	18.2	84.6	13.7
ソウル	5.1	15.0	93.9	1.0

表6 夕食の様子

(%)

	孤食率	全員で	父親のみ不在
東京	4.6	40.7	39.3
ハルビン	3.3	75.4	16.6
サクラメント	4.6	77.4	8.5
ストックホルム	10.5	64.7	13.4
オークランド	8.2	65.9	12.6
バンコク	7.1	67.4	17.8
ソウル	5.0	55.2	29.4
タイペイ	1.7	73.5	16.6

○ = 最大値と2位

●子どもの放課後とテレビ視聴)))

次に、子どもの放課後の、遊び、テレビ視聴、お手伝いなどをみてみましょう。表7をご覧ください。調査前日、放課後に友人と遊んだかどうかをみると、日本の子どもが近年遊ばなくなったと憂慮されておりますが、これは日本だけの現象ではないことがわかります。

比較的よく遊んでいるのはサクラメントで半分、他の地域では遊んだ子より遊ばなかった子のほうがはるかに多くなっています。一番遊んでいないのは、意外なことですがハルビンで、86%が遊んでいない。東京とストックホルムは同じくらいで62%と68%。しかも表8によれば、ストックホルムの子がきわめて少数の友人としか遊んでいないことがわか

ります。予備調査のときに、現地の小学校校長がストックホルムでは昔から少数の友人としか遊ばないのが習慣だ、と言っておられましたが本当でしょうか。

では、子どもたちは友人と遊ばずに、放課後には何をしているのでしょうか。

表9にありますように、テレビはハルビンを除いて一家に2台、3台もしくはそれ以上の時代となってきております。表10の昨日テレビを見た子の割合は、ハルビンを除いて極めて高く、表11によれば、平均視聴時間はハルビンを除いて1時間半から2時間半に達しております。日本だけでなく、世界的に子どもの自由時間が遊びではなく、テレビ視聴に使われていることがわかります。

表7 昨日、下校後に友だちと遊んだか
-遊ばなかった子の%-

(%)			
東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
62.3	85.5	49.4	68.2

表8 何人と遊んだか (自分以外に)

(%)			
	1人	2~3人	4人以上
東 京	21.6	47.4	31.0
ハルビン	17.7	43.6	38.7
サクラメント	20.9	37.3	41.8
ストックホルム	50.8	34.7	14.5

さて、子どもが持っている残りの自由時間でお手伝いはどのくらいされているのでしょうか。表12をご覧ください。毎日家事のお手伝いをする子の割合は、非常に少ないことがわかります。今回の調査地の東京とストックホルムの数字が特に少なく5%を割り込んでおります。

次に、表13をご覧ください。これは一日の楽しさを時間を追ってみたもので、グレイに網をかけてある項目、すなわち「昼休み」「体育の時間」「放課後の友だちとの遊び」が、どの地域でも共通に上位にきております。子どもの本質は地域に関わりなく似たものがあるのでしょうか。

表9 テレビの所有台数

(%)

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
1台	15.7	67.7	12.6	12.2
2台	41.5	29.4	26.2	48.1
3台	22.8	1.5	29.8	26.9
4台	12.4	1.0	18.4	8.8
5台以上	7.6	0.4	13.0	4.0

表10 昨日テレビを見た子

(%)

東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
90.1	61.3	87.4	95.1

表11 昨日のテレビ視聴時間

	平均時間	(見た者について)	
		1時間以下	4時間以上
東 京	1時間38分	41.1%	11.0%
ハルビン	22分	66.8	1.2
サクラメント	2時間14分	19.7	20.2
ストックホルム	2時間23分	24.6	9.4
オークランド	2時間42分	30.1	22.0
バンコク	2時間25分	24.7	12.7
ソ ウ ル	1時間41分	—	—
タイペイ	1時間44分	—	—

○ = 最大値と2位

付表 昨日のテレビ視聴時間30分以下

(%)

東 京	33.3
ハルビン	48.4
サクラメント	9.6
ストックホルム	13.1

表12 家事の手伝い（毎日する割合）

(%)

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム	オークランド	バンコク	ソウル	タイペイ
洗濯	1.7	3.5	6.5	1.0	4.4	9.7	3.2	2.1
夕食の買い物	2.4	6.4	7.1	2.4	7.3	8.5	10.2	8.9
庭や玄関の掃除	2.7	6.0	3.6	1.3	3.2	11.3	—	—
部屋の掃除	4.3	17.8	19.3	4.5	19.3	22.0	30.3	11.0
皿洗い	5.0	18.6	13.4	4.3	31.0	28.1	7.5	5.8
夕食の手伝い	6.4	4.5	15.8	2.7	13.7	7.6	6.6	7.6

— = 質問項目なし

表13 一日の楽しさ

(%)

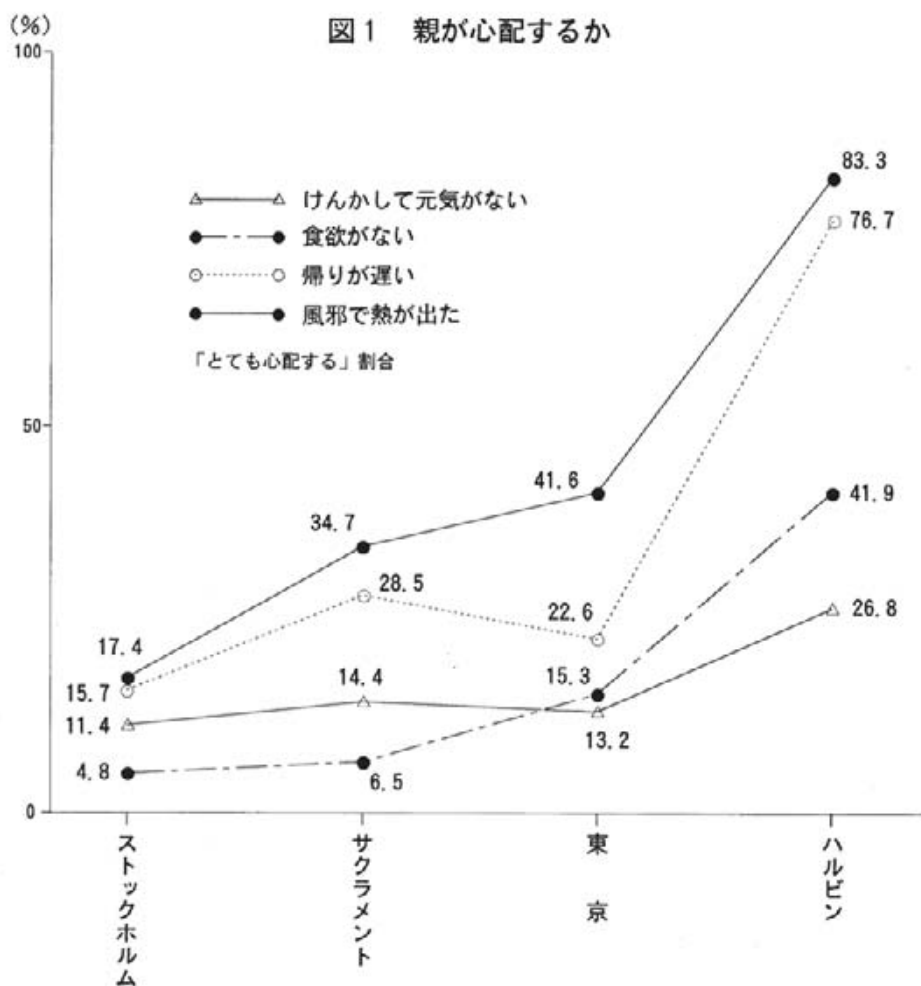
	東京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
70%		昼休み (71.3)		
60%	放課後友だちと遊ぶとき (67.7) 昼休み (65.8)	体育の時間 (66.1)		
50%	体育の時間 (54.3)		昼休み (59.5) 夜ねむっているとき (55.3) 放課後友だちと遊ぶとき (54.8)	夜ねむっているとき (54.2) 放課後友だちと遊ぶとき (53.4)
40%	家でテレビを見るとき (44.5)	放課後友だちと遊ぶとき (48.7) 算数の時間 (44.1) 夕食後父母と話すとき (41.9) 家でマンガを読むとき (41.7) 家でテレビを見るとき (41.3)	家でテレビを見るとき (46.3) 体育の時間 (45.5)	体育の時間 (43.0)
30%	給食のとき (35.6) 家でマンガを読むとき (33.8)	給食のとき (34.6)	給食のとき (37.6) 夕食のとき (35.1)	昼休み (35.8) 家でテレビを見るとき (32.2)
20%	夜ねむっているとき (29.5) 夕食のとき (27.2) 夕食後父母と話すとき (26.2) 夜ふとんに入るとき (25.0)	宿題するとき (29.5) 夜ねむっているとき (28.5) 夜ふとんに入るとき (21.8) 授業の始まる前 (20.8)	夜ふとんに入るとき (26.0) 家でマンガを読むとき (24.9) 夕食後父母と話すとき (23.1)	家でマンガを読むとき (24.1) 夕食後父母と話すとき (20.6)
10%	授業の始まる前 (15.5) 算数の時間 (12.7)	夕食のとき (18.6)	朝食のとき (19.3) 算数の時間 (19.1) 授業の始まる前 (14.1) 宿題するとき (10.1)	夜ふとんに入るとき (18.8) 朝目がさめたとき (17.5) 給食のとき (17.3) 夕食のとき (15.3)
0%	朝食のとき (7.4) 朝目がさめたとき (6.2) 宿題するとき (3.3)	朝食のとき (7.1) 朝目がさめたとき (5.1)	朝目がさめたとき (8.5)	朝食のとき (8.7) 算数の時間 (8.7) 授業の始まる前 (5.7) 宿題するとき (1.9)

「とても楽しい」割合

●親子関係)))

この辺で、家族の問題をみていきたいと思
います。図1をご覧ください。親子関係の密
度、親子の心理的距離、または親子の自立性
をみていく項目として4つの場面を用意しま
しました。「あなたが友だちとけんかをして元
気がないとき」「食欲がないとき」「帰りが遅
いとき」「風邪をひいて熱が出たとき」、あなた
のお父さんやお母さんはどのくらい心配して
くれますか、とたずねて、それぞれ「とても
心配する」「かなり心配する」「あまり心配し
ない」「全く心配しない」を選ばせました。

どの項目も一人っ子の社会ハルビンで子
どもは親から大変心配されております。一番親
が心配する項目「熱が出たとき」をとってみ
ると、ハルビンでは83%と極めて高い数字が
みられ、次いで東京の42%、サクラメントの
35%、最も低い数字はストックホルムの17%
です。ハルビンの親も心配しすぎのように思
いますが、ストックホルムの親子関係も我々
日本人には理解できない数字であります。子
どものときから親と子がすでに自立した関係
にあると解釈していいのでしょうか。それと

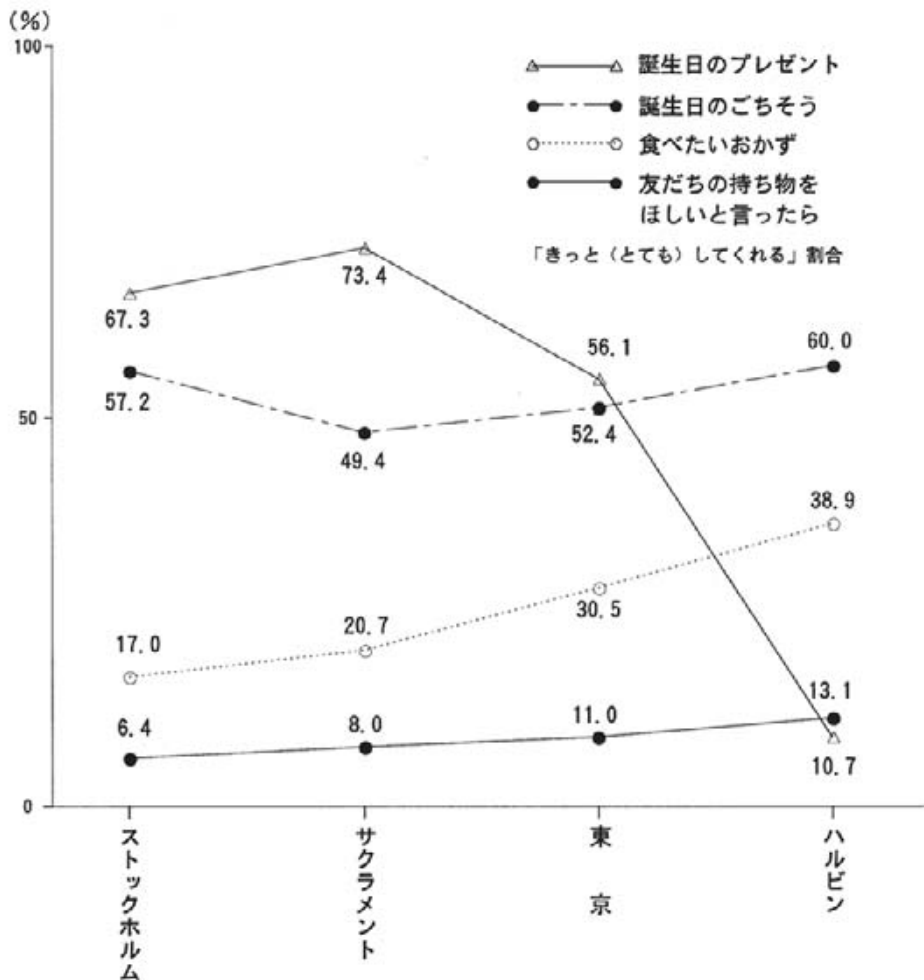


も親子関係が希薄と解釈して、10歳という年齢を考えると問題性を指摘していいのでしょうか。後でベタジョン先生や山下先生にぜひおうかがいしたい点であります。

それと関連して、親の物質的過保護をみる項目として、図2をご覧ください。これにはやはり4場面を用意しました。「友だちの持っているおもちゃや文房具をほしいと言ったら買ってくれるか」「夕食に食べたいもの

があったら、作ってくれるか」「誕生日にごちそうを作ってくれるか」「誕生日にとてもいいプレゼントを買ってくれるか」であります。この中で誕生日のプレゼントはこれまでと違いハルビンが最も低くなっておりませんが、これは後に、中国では誕生日に贈り物をする習慣がまだ行き渡っていないことがわかり、過保護をみる項目としては適切でないことがわかりましたので、上から3番目の「食事の

図2 親がしてくれるか



ときのわがママを親が聞いてくれるか（食べたいおかず）」でみていきたいと思います。

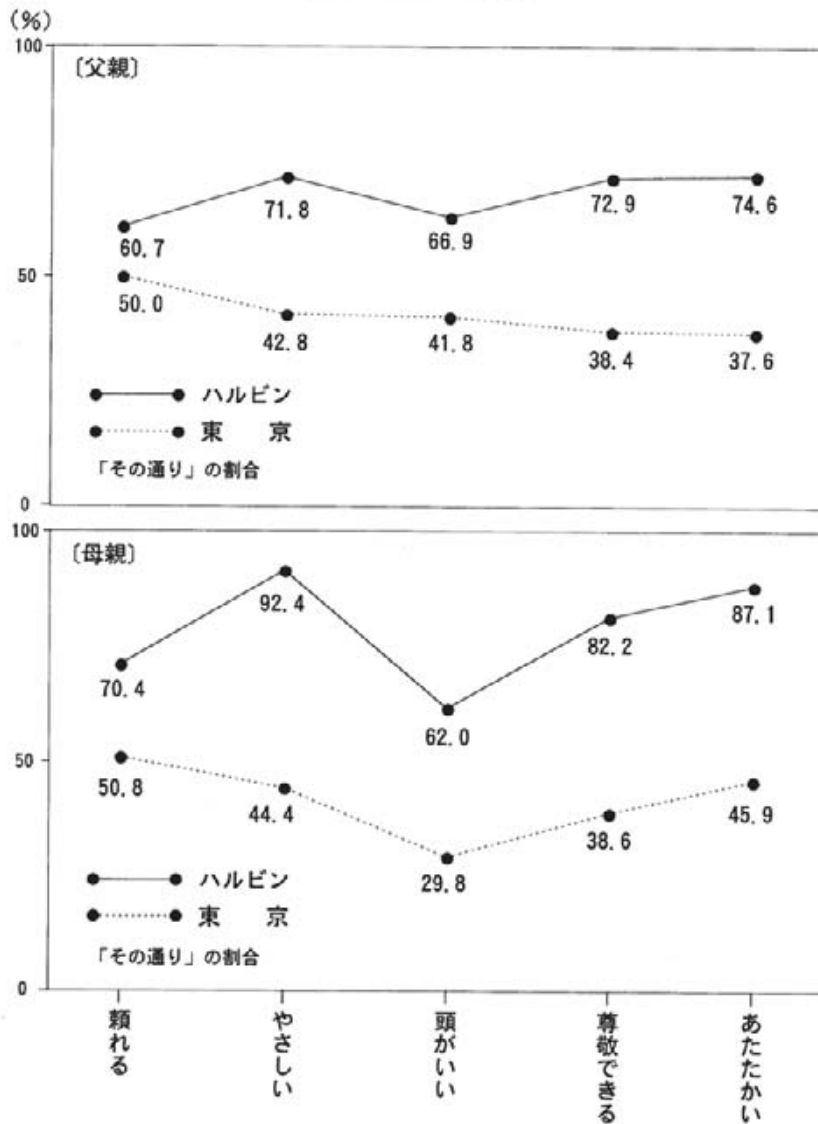
先ほどの「親が心配してくれる場面」ほどではありませんが、ここでもやはりハルビンの親の過保護ぶりが出ております。「きっとしてくれる」は、ハルビン39%、東京31%、サクラメント21%、ストックホルムでは17%となっております。

いま中国では、一人っ子社会の将来が憂慮

されていると聞きます。確かにハルビンの親子の関係は、多くの面で似通った文化圏にいる日本人からみても問題があるように思われます。

では、こうした親子関係をもう少し別の角度からみてみましょう。図3は父母の人柄を評価させたものです。これは東京とハルビンのみで行っております。図にあるように「頼れる」「やさしい」「頭がいい」「尊敬でき

図3 父母の人柄



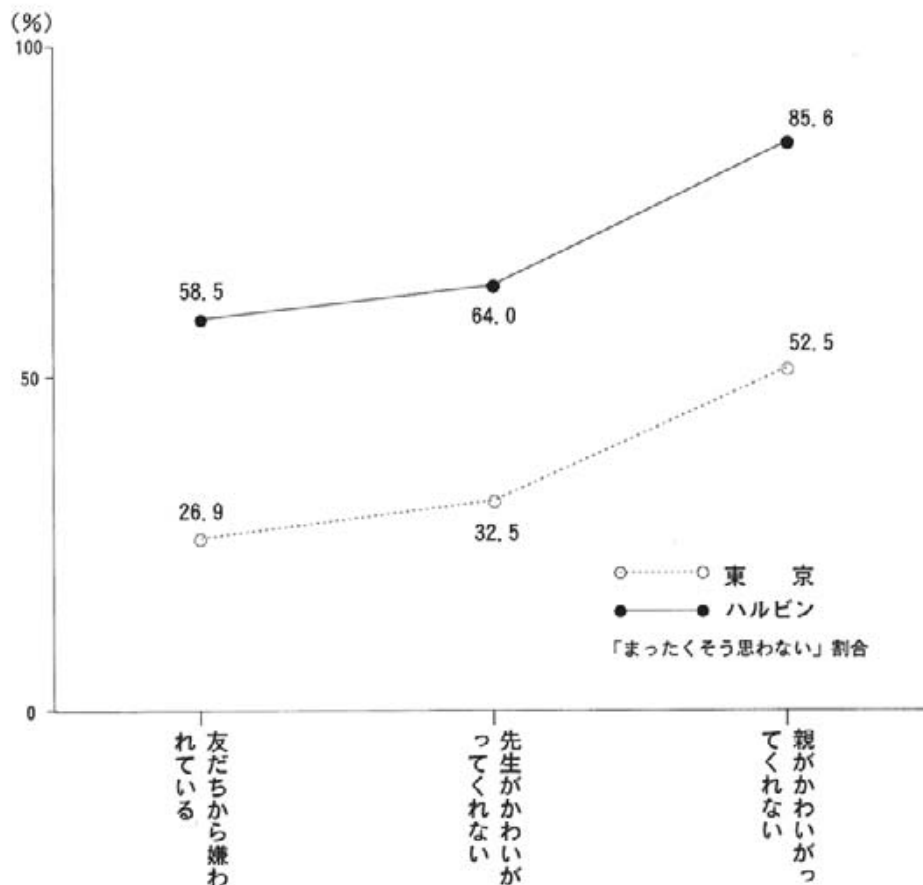
る」「あたたかい」などの父性的または母性的特性とみなされていた項目を使用しました。5項目とも、あるいは父親についても母親についても、ハルビンの子どもの両親評価は東京の子どもを大きくしのいでおります。

また、父親評価と母親評価を両地域で比べると、興味深いことにハルビンでは、「頭がいい」を除いては、全ての項目で母親が高く評価されており、東京では「あたたかい」「やさしい」ではわずかに母親ですが、「頭がいい」は断然父親、「頼れる」「尊敬でき

る」では両親がほとんど同じとなっており、両親像が接近している様子がみられます。

次に同じくハルビンと東京のデータの比較ですが、図4は、親、先生、友人との人間関係を比較したものです。全体として、親との間が一番密接で、次に先生、一番関係が遠いのは友人ということがわかります。また全ての人間関係において、ハルビンの子どもは東京の子どもより密接な人間関係の中にいることも明らかであります。

図4 人間関係の中で



●成績と将来の見通し)))

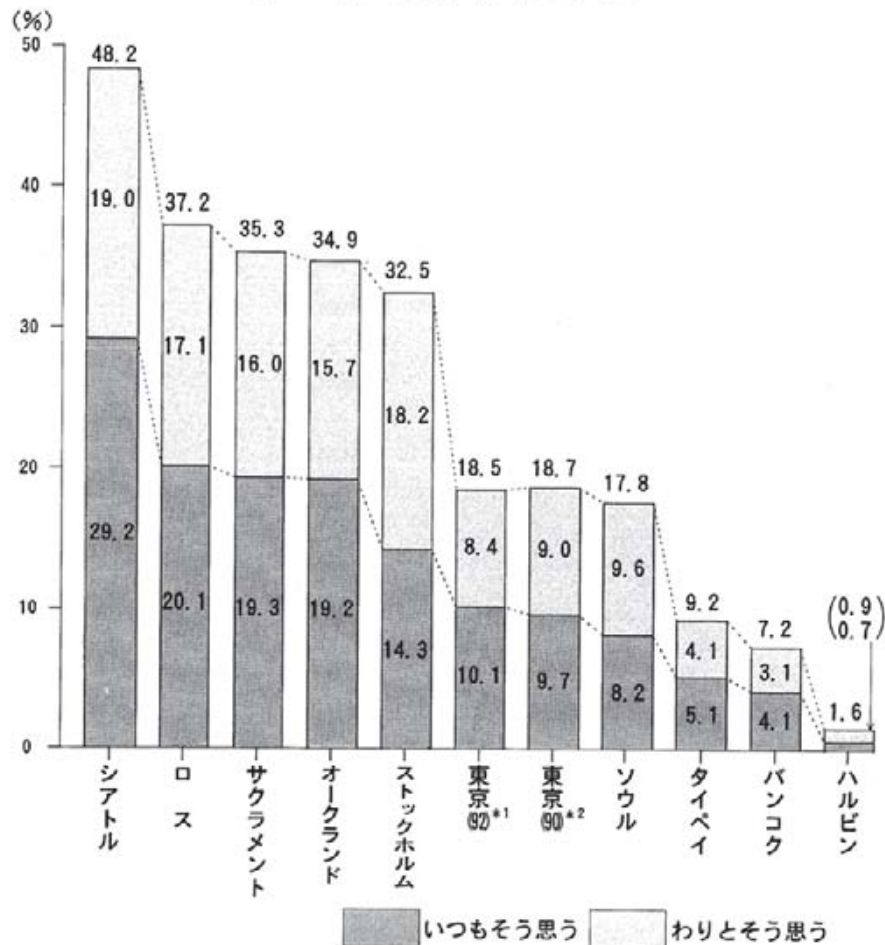
ここで角度を変えて、日本で社会問題化している不登校 (School-Refusal) に関連して、それぞれの地域で学校のもっている魅力を見ます。

図5についてみれば、朝、学校へ行きたくないと思う子は、「いつもそう思う・わりとそう思う」を含め、無視できない割合でいることがわかりますが、東京を真ん中にして、左は欧米文化圏が並び、右はアジア文化圏が並んでおります。つまり、欧米文化圏では学

校へ行きたくない子が多く、アジア文化圏では学校が、依然としてかなり魅力のある場所であることが示されております。この点についてもなぜなのか、後ほどご意見をいただければ幸いです。

これと関連して、表14をみてみます。この中で日本の勉強時間は1時間前後と大変短くなっていますが、これに塾通いを入れると勉強時間は、かなりのものになると考えられます。

図5 朝、学校へ行きたくない



*1 (92) = 1992年調査、*2 (90) = 1990年調査 以下同

学校に行くのが楽しいというアジア文化圏のほうが、勉強時間が長くなっています。つまり勉強することに価値のある社会であることが示されているのではないのでしょうか。

次に勉強に関連して、成績の自己評価をみます。日本の子どもの成績の自己評価の低さは、これまでにたびたび問題にしてきましたので多くは触れませんが、第1回、2回のデータも合わせた図6をみると、改めてアジア文化圏の子ども、特に日本の子ども

の自己評価の低さが目につきます。

図7は「勉強のできる子は、なぜできるのか」という能力観をみたものであります。ハルビンの子どもは、それを「先生の話をよく聞いているため」という、態度の問題にしています。サクラメントやストックホルムでは、「生まれつき頭がいいから」という能力差を認める見方が、「よく話を聞くから」という態度の問題に次いで多くなっております。東京の子どもは、「長時間勉強すればいい」と

表14 平均勉強時間

ソウル	2時間54分
ロス	2時間25分
ハルビン	2時間6分
タイペイ	1時間51分
バンコク	1時間44分
サクラメント	1時間42分
東京(90)	1時間17分
シアトル	1時間15分
オークランド	1時間13分
ストックホルム	1時間3分
東京(92)	58分

いう努力至上主義が、4地域の中では一番高くなっております。

勉強の背後には、進学問題があると思われませんが、表15をみると、日本の子どもたちは勉強している割には、大学進学希望者の割合が、なぜか低くなっております。

さらに、図8をご覧ください。自分の将来の見通しをたずねると、「しあわせな家庭を作る」「よい親になる」「仕事で成功する」など6項目のほとんどで、東京の子どもは自信

がないことが現れております。中ではサクラメントの子どもが自信をもっており、ストックホルムの子どもは「しあわせな家庭を作る」や「よい親になる」などの家庭面では自信をもっておりますが、「仕事で成功する」は低く、福祉社会の特質が将来の見通しの中に現れている感じであります。またハルビンの子は全体的に自信をもっていますが、「お金持ちになる」だけは落ち込んでいて、ここにもその社会の特質が現れております。

図6 成績のよい子の割合

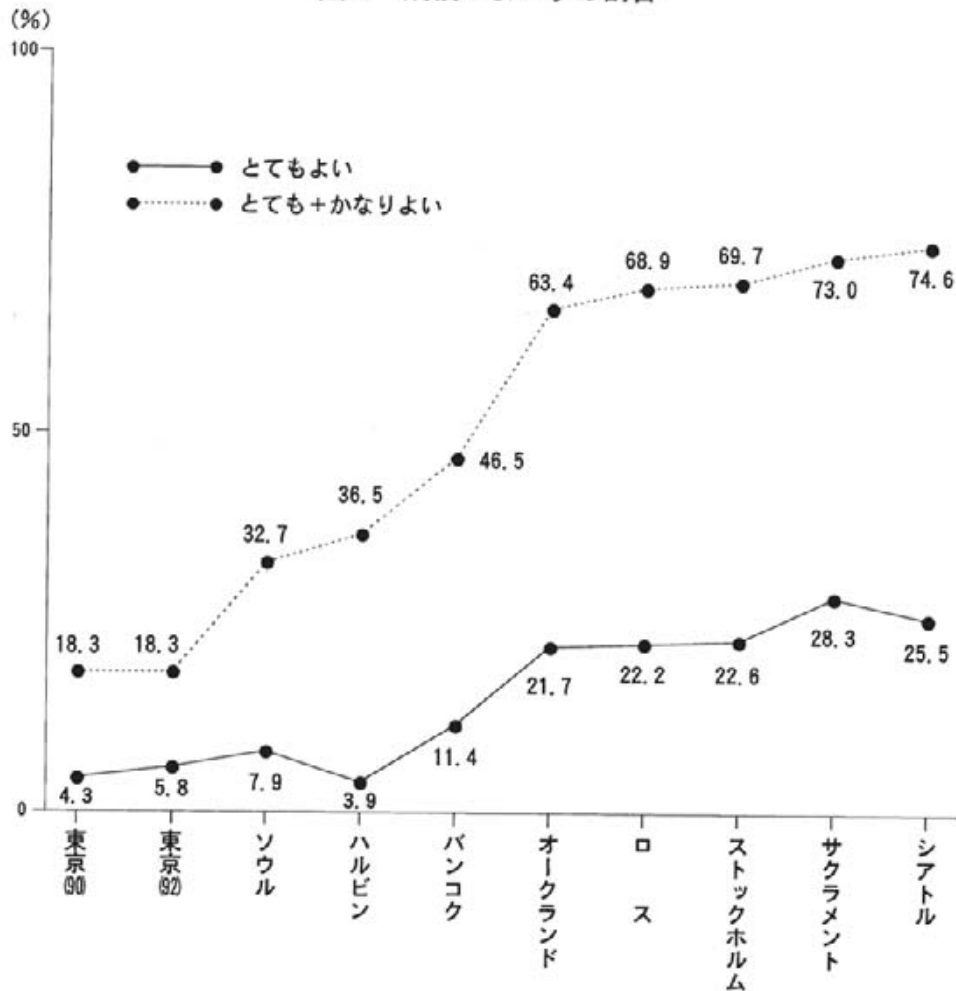


図7 勉強の得意な理由

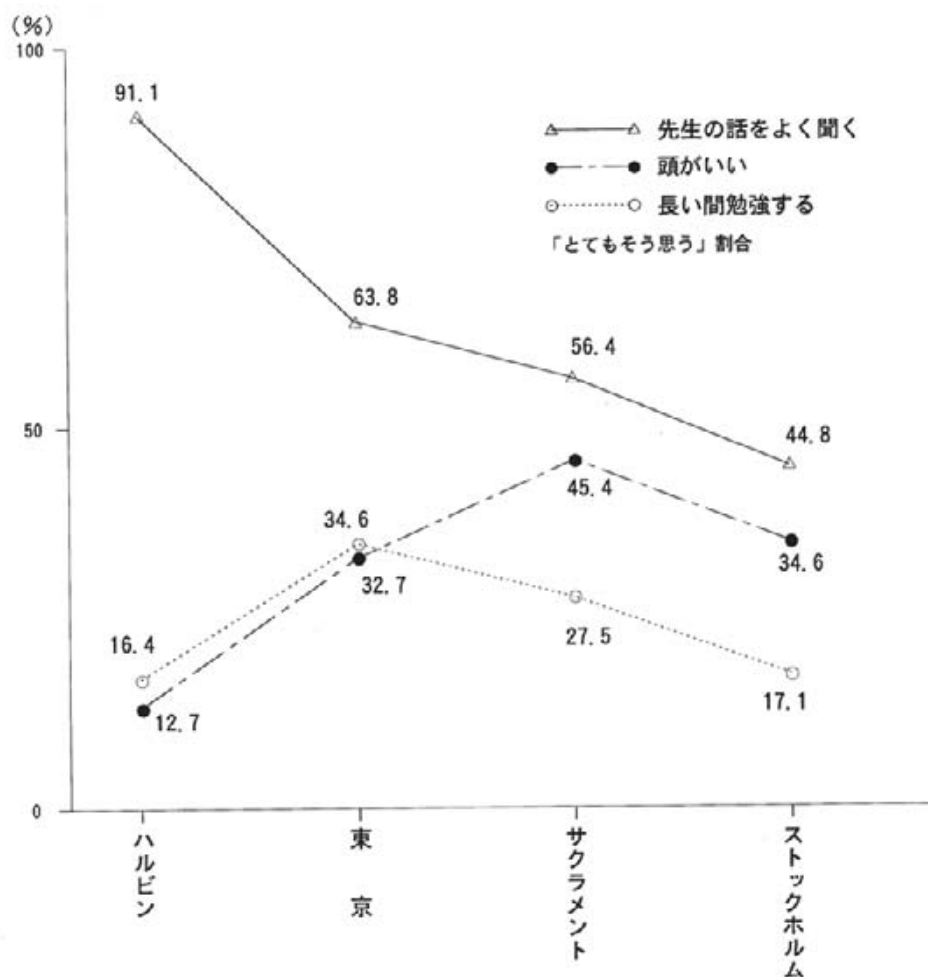
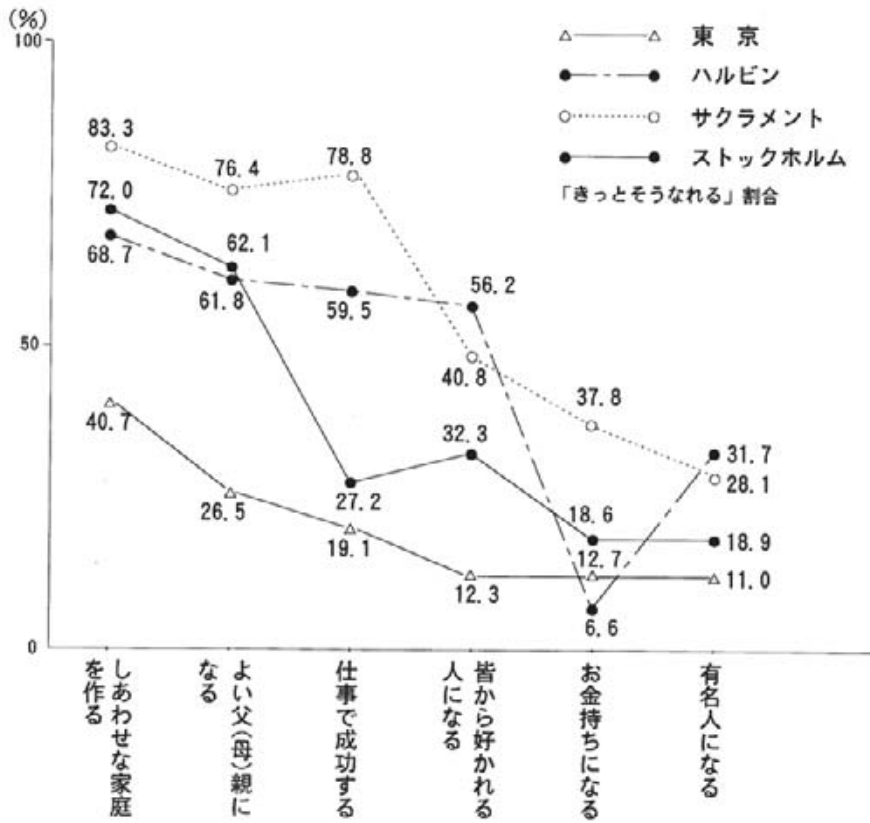


表15 大学へ進学したい割合

(%)

ストックホルム	東京(90)	オークランド	東京(92)	サクラメント	シアトル	ロス	バンコク	ハルビン
37.8	67.2	67.8	68.0	74.6	84.8	90.8	93.1	94.4

図8 将来の見通し



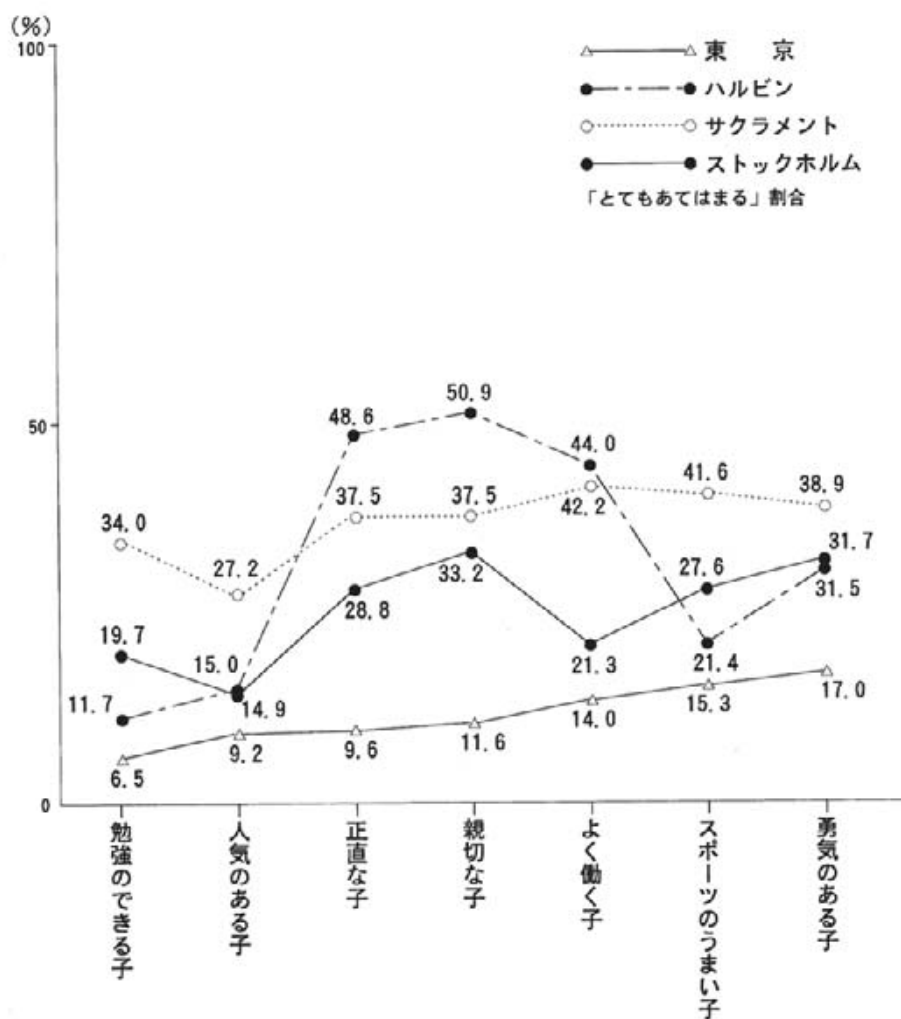
● 幸福感と成長欲求)))

次にまた角度を変えて、子どものしあわせ感を探ってみることにいたします。

図9をご覧ください。人が「自分をどういふ人間だと思うか」は、人間の基本的な幸福感に関わる大切な問題と思われませんが、鎖線のハルビンでは真ん中の「正直、親切、よく

働く」が高い数値を示しており、点線のサクラメントでは両端の「勉強ができて、人気がある子、スポーツができて、勇気のある子」という、いかにも子どもらしい積極的で明るい自己像が特徴であります。ここでも東京の子は全部に際立って低い評価が特徴的であり

図9 自己評価



ます。

図10をご覧ください。毎日がつまらないかどうかの項目には、右端の東京、ハルビン、ソウルなどのアジア文化圏の子が否定しており、左端の高い肯定率はシアトル、ロスにみられます。ストックホルム、サクラメントはほぼ中央であります。もっとストレートに、しあわせかどうかをたずねた表16によると、アジア文化圏ではしあわせだと答える割合が高く、欧米文化圏ではしあわせ感が薄いのが特徴であります。なぜでしょうか。

もうひとつ関連したデータとして、図11をご覧ください。「早くおとなになりたいか」「いつまでも子どものままでいたいか」「小さい頃に戻りたいか」という成長欲求をみると、ハルビン、タイペイでは成長欲求が強く、ストックホルムをはじめとする欧米文化圏では「いつまでも子どものままでいたい」と、成長を望まない様子がみられます。これは親の離婚などによる家庭解体などが、おとなの生活を回避する原因として働いているのでしょうか。

図10 「毎日がつまらない」

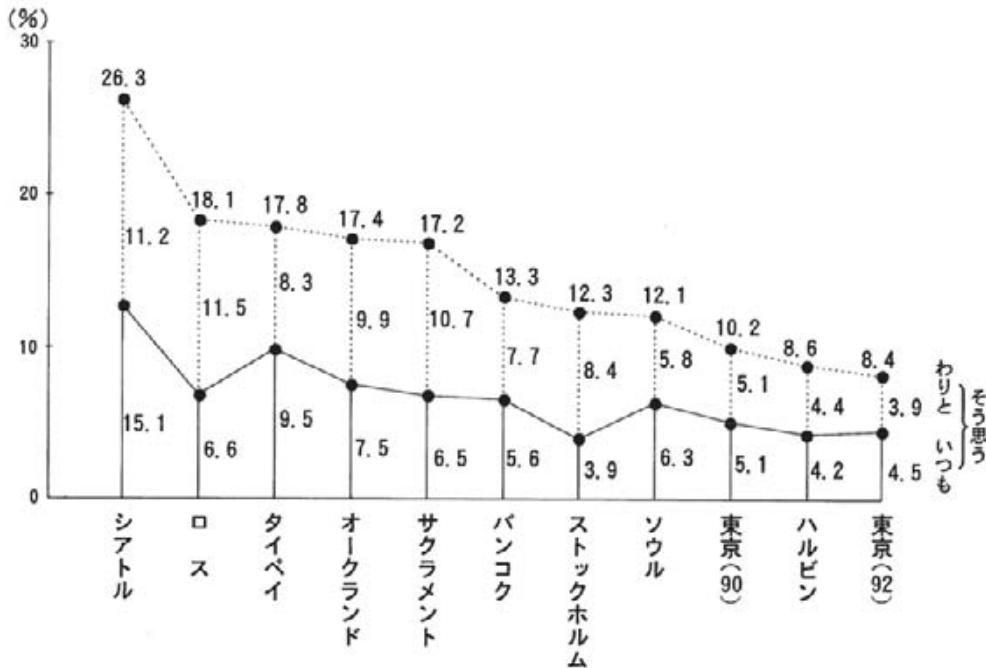


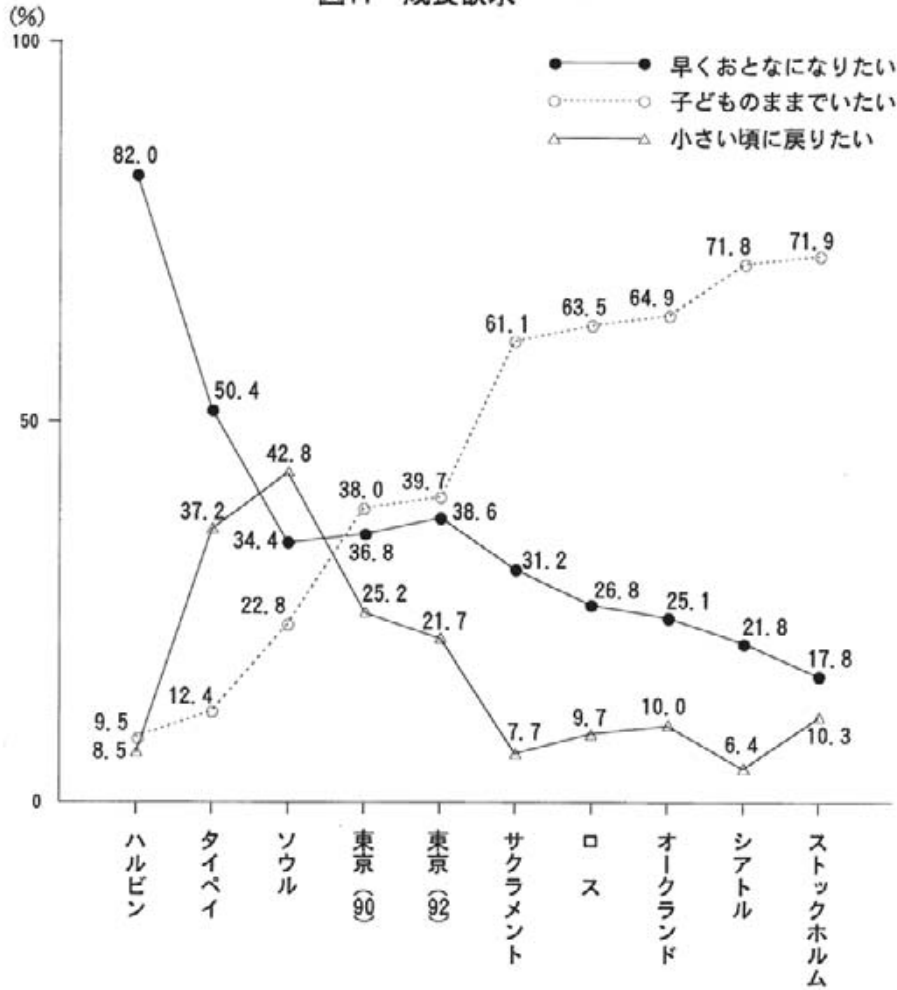
表16 しあわせ感

(%)

	しあわせ		小 計
	とても	かなり	
(ハルビン) *	(67.8	29.7)	(97.5)
ソ ウ ル	57.6	19.0	76.6
タイペイ	56.2	24.1	80.3
バンコク	53.2	25.7	78.9
東京 (90)	45.2	25.6	70.8
東京 (92)	44.8	25.6	70.4
ストックホルム	35.9	39.6	75.5
ロ ス	33.9	39.9	73.8
シアトル	29.6	35.0	64.6
サクラメント	28.0	38.1	66.1

*ハルビンは、学校が「とても」「かなり」楽しい割合

図11 成長欲求



●性役割))

最後に性役割、ジェンダー役割の問題をみていくことにいたします。

図12は女子の結婚観で、「将来結婚しても働き続けるか」「子どもを持たずに働くか」それとも「結婚したら仕事をやめて専業主婦になりたいか」をたずねたものです。

ハルピンは専業主婦志向がゼロ、ストックホルムは82%がワーキングマザーを望んでいるのに対して、東京では逆に専業主婦志向が61%と際立って高くなっております。なぜなのでしょう。

男子はどうでしょうか。図13をご覧ください。ハルピンでは86%が働く妻を望んでいるのに対して、東京では逆に61%が専業主婦を妻に望んでおります。

女子の希望と男子の希望は、ちょうどうまく一致していることがわかります。このような東京の子どものジェンダー役割の受容率の高さ、いわば保守性は次に示す2つのデータからも裏づけられます。

表17をご覧ください。これは先にみた「手伝いを毎日する割合」を女子分の男子で計算し、男子が女子より余計に手伝う項目を100を基準として表そうとしたものです。

100を超える数値は、女子より男子がより多く手伝っていることを示しますので○をつけておきました。100よりかなり低い指数、すなわち女子のほうがより多く手伝っている項目には、アンダーラインを引いてあります。

ハルピンもサクラメントもストックホルムも○がいくつかついております。つまり、男子のほうが女子より余計に手伝っている項目があるのに、東京は6項目のうち5項目に4地域のうちの最小値を示すアンダーラインがついており、女子が伝統的な性役割をしっかり受容していることがみられます。

これと関連して、表18は自己評価の性差で

あります。ここでは男子分の女子で指数化してあります。100を超えるのは、女子のほうが自己評価が高いことを示します。ストックホルムでは女子のほうが、(一番上)スポーツがうまく、(2番目)人気があり、(3番目)勉強ができて、親切で、勇気がある、と他地域と比べ全く性役割が逆転しているかのような数字がみられます。ストックホルムの女子の元気で明るい自己像に比べ、男子の自己像はなぜこんなにも小さくて暗いのでしょうか。

サクラメント、ハルピンでは○のついていない項目の指数もほぼ100で、性役割の接近している様子が特徴的です。

しかし東京は、ほとんどにアンダーラインがついており、男子に比べすべての面で女子の自己像が小さく暗いことが特徴的です。

もうひとつ、表19は先ほどみた将来の見通しの性差ですが、「きっとそうなる」の数値をとって、男子分の女子で計算してあります。100を超えたものに○がついていますが、これは女子のほうが自分に明るい将来を予測していることを示します。ここでも○はストックホルムに多く、「お金持ちになる」は355、「有名人になる」は278、「仕事で成功する」は161という、高い指数になっております。先の結果とも合わせて、なぜストックホルムの女子がこんなに積極的で、男子に元気がないのか、この点もぜひうかがってみたいところであります。

以上で今回の調査の主な結果をざっとみてまいりました。こうした結果をふまえて、これから討議していただきたい問題を提出したいと思います。

1. まず、親子関係の問題で、ハルピンの親子関係は過保護で密着しすぎておりますが、これは全員が一人っ子という社会のもたらす

ものでありましょう。これが将来、社会として問題を生むことはないのか。それに対して、ストックホルムの親子関係は、逆に関係が希薄で問題があるとみるべきか、それとも早くから親子が相互に自立した関係を作っている理想の親子の姿とみていいのでしょうか。

世界的に少子化や女性の社会進出が進行しつつある中で、これは大変興味ある問題だと思います。

2. 次に子どもの幸福感と成長欲求の問題であります。欧米文化圏に幸福感が低く、学校が楽しくなく、いつまでも子どものままで

いたいという子が多いのはなぜか。これは家庭の解体と関係があるのでしょうか。

3. 3番目は性役割の問題で、なぜ日本の子はこれほどまでに性役割を受容しているのでしょうか。

逆にストックホルムの女子はどうしてこんなにも、明るく元気なのか。男子に元気がないのはなぜでしょうか。これは理想に近い福祉社会が実現していることと関連があるのでしょうか。とすれば、今後どの国でも女性が元気で男性が勢いが弱いという傾向が世界的に起こってくる可能性があるのでしょうか。

図12 女子の結婚観（女子）

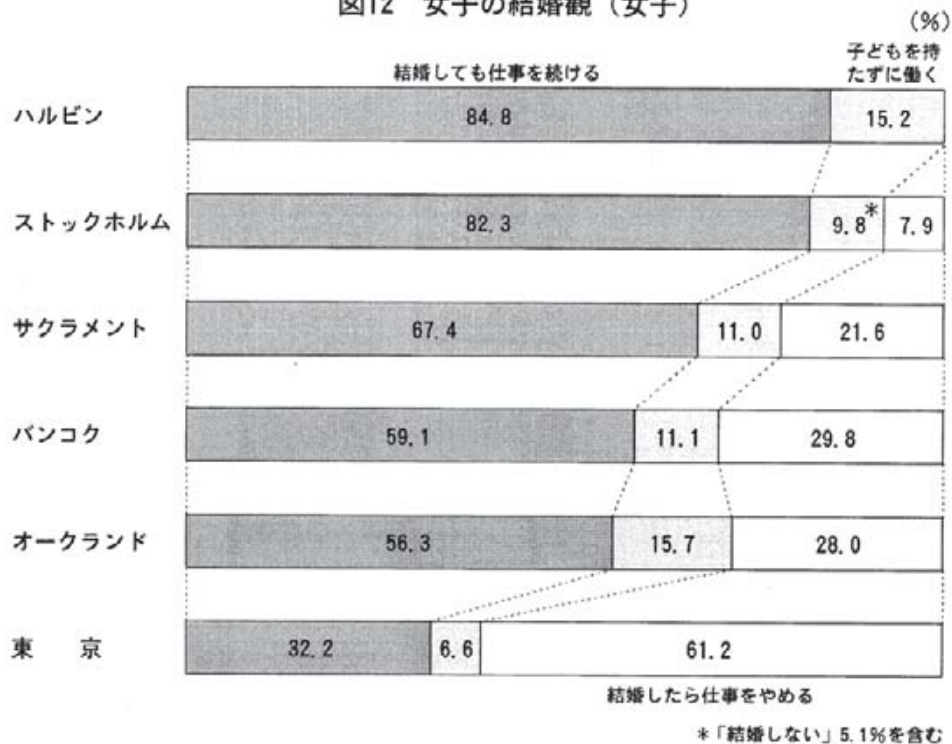
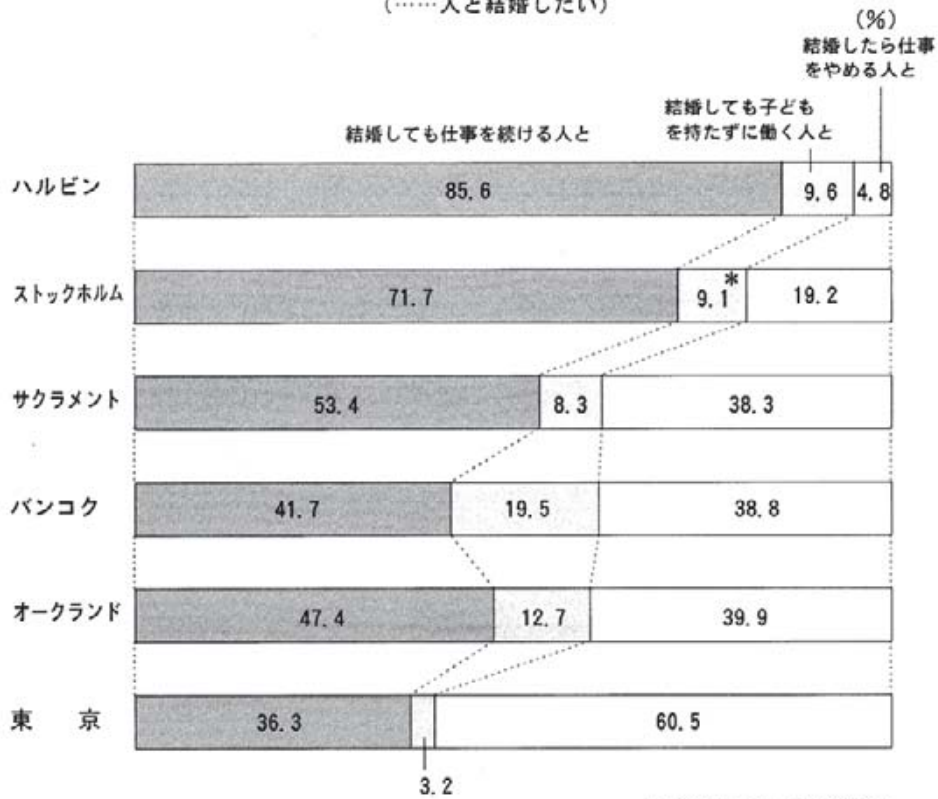


図13 男子の結婚観（男子）
（……人と結婚したい）



*「結婚しない」6.8%を含む

表17 家の手伝い × 性差

	東京			ハルビン			サクラメント			ストックホルム		
	男子	女子	男子/女子	男子	女子	男子/女子	男子	女子	男子/女子	男子	女子	男子/女子
洗濯	5.8	10.7	54.2	15.7	16.7	94.0	18.4	24.1	76.3	2.9	4.0	72.5
夕食の買い物	15.8	21.3	74.2	39.8	33.9	117.4	31.2	35.8	87.2	7.7	8.4	91.7
庭や玄関の掃除	13.6	15.8	86.1	19.4	23.3	83.3	33.3	8.6	387.2	11.7	25.9	45.2
部屋の掃除	21.2	28.5	74.4	54.4	52.9	102.8	40.7	46.1	88.3	31.6	20.9	151.2
皿洗い	12.7	29.8	42.6	46.8	53.8	87.0	25.5	39.2	65.1	25.1	13.7	183.2
夕食の手伝い	17.7	39.1	45.3	16.9	9.7	174.2	31.2	38.1	81.9	19.3	15.2	127.0

「毎日+わりと」する割合
○ = 指数が100を超える項目
* $\frac{\text{男子}}{\text{女子}} \times 100$

表18 自己評価 × 性差

(%)

	東 京			ハルビン			サクラメント			ストックホルム		
	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子
スポーツのうまい子	20.4	9.8	48.0	29.7	13.4	45.1	59.8	24.0	40.1	15.9	38.9	(244.7)
人気のある子	12.4	5.8	46.8	17.9	12.3	68.7	32.3	22.2	68.7	10.8	19.2	(177.8)
勉強のできる子	9.4	3.6	38.3	14.6	8.9	61.0	33.9	34.3	(101.2)	17.4	22.2	(127.6)
正直な子	11.2	7.9	70.5	44.9	52.0	(115.8)	35.8	39.1	(109.2)	30.6	27.7	90.5
親切な子	13.1	10.1	77.1	49.5	52.0	(105.1)	33.1	41.8	(126.3)	30.5	36.0	(118.0)
よく働く子	17.6	10.1	57.4	40.7	47.1	(115.7)	41.4	43.1	(104.1)	23.2	19.7	84.9
勇気のある子	19.1	14.8	77.5	39.7	23.7	59.7	48.5	29.6	61.0	24.1	39.2	(162.7)

「とてもあてはまる」割合

○ = 指数が100を超える項目

* 女子
男子 × 100

表19 将来の見通し × 性差

(%)

	東 京			ハルビン			サクラメント			ストックホルム		
	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子	男子	女子	女子* 男子
皆から好かれる人	16.5	7.7	46.7	49.1	61.8	(125.9)	39.3	42.4	(107.9)	29.9	35.4	(118.4)
よい父(母)親になる	30.1	22.6	75.1	56.4	66.4	(117.7)	73.1	79.4	(108.6)	63.0	61.8	98.1
有名人になる	16.4	5.1	31.1	35.2	27.8	79.0	35.0	21.5	61.4	10.1	28.1	(278.2)
お金持ちになる	18.2	6.7	36.8	7.8	4.6	59.0	46.4	29.7	64.0	8.2	29.1	(354.9)
仕事で成功する	24.7	13.1	53.0	67.5	51.9	76.9	29.1	33.2	(114.1)	21.1	34.0	(161.1)
しあわせな家庭を作る	42.0	39.4	93.8	71.3	66.1	92.7	66.7	67.4	(101.0)	72.6	70.8	97.5

「きっとそうなる」割合

○ = 指数が100を超える項目

* 女子
男子 × 100